

創立十五周年を迎えて

学校長 飯野竹二郎

本校は今年で創立滿十五年を迎えるので、この機会に十五年史を編み、ささやかな祝典を持つという事になった。何せよ、創立の年が太平洋戦争突入の前年という異常な時であり、その後二度の戦災にあつて、すべての記録を焼失し、また二年有餘の放浪生活にも詳細なものがなく、創生記がほとんどプランクのままになっているので、この際現存する人々の記憶や手記によつて、当時の正確な資料を集め、これを整理して後人に残すこととした次第である。今にしてこれを怠ると、あとでは求めても得られず、悔を残すことになるであらう。

芦高が苦難の時期に誕生し、しかも日ならずして災厄に打ちひしがれたにもかかわらず、僅々十五年にして、今日の輝かしい飛躍発展をなし得たことは、大いなる驚異である。私はこの発展の途上、幸運にも隆運の座に安任して、これに寄与すること極めて薄いが故に、少しも謙遜するの要なく、声を大にしてこの感懐を率直に表明する。これは全く芦高にゆかりある者、芦高を愛して下さる者、それら各種各層の総力が結集されて、今日をあらしめたのである。育友会（前身は興学会）旧会長の座談会、旧教職員の座談会、卒業生の座談会等に列席し、今更ながら創業の苦心の並々ならぬこと、かくれた力のお蔭を受けていることなど、しみじみと感じた。それらの寄与の中には、新理念への移行に伴い、空しく消え去ったものがあるとしても、学校愛につながる真実一路の努力そのものは、永く後進を感銘させ、感謝の種となることであらう。今日の盛況を培った諸恩恵に対し、心からの感謝を捧げるものである。

新日本の発足とともに、いまわしい過去を払拭清算し、新しい民主的理念に生きようとする今日において、何の意義を自覚し、何の郷愁を感じて、戦前の過去をさぐるうとするのか、との疑念を持たれる者があるかも知れない。一応もつともな疑問である。われわれの指標は過去の迷妄を排して将来をめざし、視野は局所よりも広く世界にわたらなければならぬことというまでもない。芦高の歴史は戦前をうけて、戦後のいぶきをしているものであるが、戦時の卒業生といえども、戦後に

おける後進の先輩として、新理念をかざし、雄々しく活躍しているのである。学園芦高、われわれ今ここに在る者も、すでに送られた者も、また迎えられる者も、現前の事実として、この学園に相寄る魂がここに触れあい、共感し、反撥し、感激し、懷疑しつつ、若き生命を最高度に燃焼させつつ成長してゆくのである。そして誰もが永く魂の故里としてここをなつかしむことであらう。また今後芦高に学ぶ者が、先輩達の活躍の跡を知りたいと思うことも、極めて自然にして、意味深い欲求であらう。高く跳躍する者は大地を強く踏まえる。大地を正しく踏まえようとする者が、大地のコンディションに無関心であるはずがない。だからこの十五年史は、学園の全貌を初めから今となく、ありのままに記そうとするのである。時代の圧力に歪められた動きはそれとして、そのまま記しつつ、その行間に若人の情熱があるがままの姿にさぐり、そこに露呈される純真にして、永遠性あるものをさぐるうとするのである。そしてお互の共感友愛のきずなとしたいのである。魂の故里として残したいのである。